
ジュン・アイ

水端智絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジュン・アイ

【Nコード】

N9191I

【作者名】

水端智絵

【あらすじ】

公佳は過去に傷を持つ女性です。人を信用できなくなり、誰にも本当の自分を見せられなくなってしまいました。そんな彼女が、ある出会いを通して変化していく姿を描いていこうと思います。

一人暮らし

名古屋に向かう電車の窓からはまぶしいぐらいの日差しが差し込んでいたが、わたしはカーテンも閉めずに外をぼんやり眺めていた。桜の木がピンク色に染まっている。一度閉じたつぼみもまた膨らんできたみたいだ。

昨日は本当に寒かった。春がちつとも来ないのは、自分の心が冷たいままのせいなのかと変な思い込みをしていたが、天気だけは、わたしの味方をしてくれているらしい。

今日からわたしの一人暮らしが始まる。この日をどんなに待ち望んだことか。

大学の近くで部屋を借りたことを話したとき、おばさんは予想通りしかめっ面をした。きれいな顔が台無しだ。

「おばさん、公ちゃんきみはこのうちから通うつもりで、名古屋の大学にしたと思ってたのよ。岐阜からなら通えないことないじゃない。

女の子の一人暮らしなんて何があるかわからないし。」

めったにわたしと口を聞かないおじさんもこんなことを言ってきた。「そうだよ、公佳ちゃんきみが。おばさんも心配して言ってるんだよ。もちろん、おじさんもおばさんと同じ意見だよ。最近、若い子が事件に巻き込まれているニュースとか見ると、公佳ちゃんはいじょうぶだろうかなんて思ってしまうよ。」

久しぶりに口を聞いたと思ったら、父親面して。そう言われると思ったから、ぎりぎりまで内緒にしていた。名古屋にしたのはおばさんにここから通うと思わせるためであって、本当はもっと遠くでも良かった。母親でもないのに、わたしのすることにいちいち干渉してくるのはうんざりだった。

おばさんは、わたしの母の姉に当たる。

わたしは高校1年生のとき、両親を一度に亡くした。わたしには兄

弟姉妹もなく、両親がいなくなったことでやつとひとりになれたわけだが、おばさんとおじさんは引き取りたいと言って引かなかった。「もう、子供じゃない。それに、あの二人が死んだことで、保険金も入ってくるんだし。わたしひとりでも生活できるから。ほっといてよ。」

わたしは反発した。もう誰とも一緒にいたくなかった。

「おねがいだから、うちに来てちょうだい。あなたをひとりにはさせられないの。せめて高校を出るまでは面倒を見たいの。」

なぜそこまで言うのかわからなかった。二人には、子供がいなかったから、親子というものを経験したいのかも。勝手に言っていればいい、最初はそうやって無視を続けていた。

だが、結局それを受け入れざるを得なくなった。おばさんを頼り、今まで暮らしていたところから逃げ出してきた。

あのとき、ひとりで生きていくことはできないことはなかったと思う。だが、それに伴う苦痛は計り知れないものだと思つたとき、耐えられなくなつてしまったのだ。

人間なんて最後は一人なのに、「世間」はそれを認めてくれない。二人にはお世話になつた。でも、この人たちもわたしには「世間」なのだ。

「もう決めちゃつたの。通う時間を勉強に費やしたいのよ。おじさん、おばさんには迷惑はかけないから。それに、親の保険金で卒業するまでの学費と家賃は賄えるはずだよね。」

わたしは、前々から考えていた言い訳をすらすらと言つた。納得したのか、おばさんは少しわたしを見つめると黙つてしまった。そして、目をそらす。

そのとき、その目のそらし方にわたしはなぜか違和感を感じた。なんだらう？何か隠していることがある？

重い空気が漂い始めたとき、ようやくおばさんが口を開いた。

「そう、自分で決めたのね。」

理解してくれたのはいいのだが、さっきの違和感がまだ心のどこか

で引つかかっていた。
その違和感を解決できないまま、わたしの一人暮らしが始まることになったのだ。

名古屋に近づいてきた。荷物はスーツケース1つのみ。引越し業者を使う必要もなかった。なんだかこの荷物の軽さって、今の自分の価値とおなじなのだろうか。
外の景色を眺めながら、18年間の自分を思った。うそばかりの自分がいつもいた。でもホントの自分は誰にも見せられなかった。たった18年生きてきただけなのに、なんでこんな重いものをわたしは背負っているんだろう。

自分の価値は軽いのに、背負ってきたものは重いなんて、理不尽だ。そんなことを考えているうちに、名古屋駅に到着した。地下鉄に乗り換え、15分程で、目的の駅に着く。

さて、ここからどうしようか。タクシーに乗ればすぐに着くけど。少し考えて歩くことにした。結構かかるかもしれないが、今日の気分はそうすることを肩押ししている。

スーツケースを引っ張りながら、少し遅めに歩く。
周りの景色を1つ1つ確かめながら、ようやくひとりになれたことの喜びを実感しようとした。でも、そうすると昔のいやな思い出まで一緒に思い出されてしまう。

今だけは何も考えないでただ歩こう。これからだって何が起こるかわからない。頭が考え事でいっぱいになる前に空っぽにしておかなくては。

大通りに沿って歩いていたので、かなり車が頻繁に通る。通りにはいろんな店も建っているが、少し中に入るとそこは住宅街だ。

そして、30分ほど歩いたところで、見覚えのある家の前で立ち止まった。今日から住むところだ。ここは一戸建ての家である。一人暮らしとは言うものの、2階スペースは大家さんが住んでいて、空いていた1階スペースをわたしが借りたのである。

鍵はもらっていたので、門を開けて、中に入った。

実は、大家さんにはまだ会ったことがなかった。なかなか忙しい人のようで、会えずじまいだったのだ。今日は在宅していると聞いていたので、挨拶をしようと思い、2階に上がり、チャームを押した。「はい」

そのとき、わたしは一瞬ひるんだ。インターホンから男の人の声がかくもって聞こえてきたからだ。てっきり女の人の声がすると思っていたのだ。

そういえば、そういうことは何も聞いてなかった。自分で勝手にそう思い込んでしまったことにいまさら気付いた。

「あの、今日からお世話になります、浅野です。えっと、ごあいさつさせてもらっていいですか？」

何とか、一通りのことは言うことができた。でも、心臓は急ピッチで動いていて、ぜんぜん収まりそうにない。どうしよう。そのまましばらく待っていると、ドアが開いた。

部屋探し

2月終わりに、私立大学への入学が決まり、わたしは部屋を探しはじめた。部屋探しは初めてだったので、何を基準にすればいいのか検討もつかず、住宅情報誌なんかをぱらぱらめくってみたり、ネットで見てもたりもしたのだが、結局適当に不動産屋に飛び込んだのだった。

もちろん、そんなところに入るのも初めてで、どうしていいかわからない。とりあえず、中に張ってある、いろんな間取り図を眺めていた。

「お部屋をお探ですか？」

声が出たほうに振り向くと、24〜5歳ぐらいのきれいな女の人が微笑んでいた。

「春から一人暮らしをはじめの予定なんです。こういうのはじめてで見てもよくわからないんですけど。」

「学生さんですよね？どちらの大学ですか？お部屋のイメージを言っていたら、こちらでいくつか間取りを出しますよ。」

学校名を告げ、自分のイメージを伝えると、お座りになって少しお待ちいただけますかと言われた。カウンターに座り、申込書のような用紙に、名前や連絡先を書いていると、さっきの女の人に戻ってきた。

「桑原です。よろしくお願いたします。」

名刺には「桑原 恵」とあった。そして彼女は5〜6枚ほど物件の資料を並べた。

「お客様の条件にあったものを何件がピックアップしてみたいんですけど。どれか気になるものとかあったら、今からでも実際にごらんいただけますように、手配しますよ。」

家賃も内装も設備もだいたい似たような物件がそろっていた。

「家賃は安ければ安いただけ助かるんですけど。あと、写真じゃわか

らないことで、どうしてもゆずれないことがあるんですけど。」
これを言うのはためらわれたのだが、でもこれを解決しておかないと、毎日苦しまなくてはいけないことになるかもしれない。

「住むところですから、妥協しないようにしてくださいね。こだわりのあるなら、おっしゃっていただければ探しますよ。」

わたしは一呼吸おいてから、少し声を落として言った。

「あの、おとなりが男の人だと困るんです。」

桑原さんはちよつと意味がわからないような顔をしてわたしを見た。やっぱり変だと思われるんだ。

「あ、ごめんなさい。今言ったことは気にしないでください。あの、こことか連れてってもらえますか？」

わたしは、目の前に並んでいた物件の1つを指差して言った。

彼女は、取り乱しているわたしを少し見つめて、こう言い放った。

「わたしは、これからほかのお客様のお約束があるので、ご案内することができないのですが、近野という男性スタッフがおりますので、そちらにご案内させますがよろしいですか？」

「え？」

「あちらのものに案内させますが。」

桑原さんが示したところにいたのは、30歳ぐらいの男の人だった。わたしが変だから、案内するのは嫌になったの？でも、そんなの困る。

「あの、他の女の人はいないんですか？」男の人と部屋の中に2人で入るなんていやだ。

「申し訳ありません。他の者は今出払っていますので。」

「・・・やめて」わたしの正常な思考はここで止まった。

「えっ？どうしました？」

「男の人と二人きりで部屋に入れるわけないじゃない！冗談やめてよ！なんで、みんな、わたしにそんなことするのよ！」

わたしは、ほとんど叫んでいたようだ。そして、カウンターの上にあった書類やなんかをぐちゃぐちゃにしてしまうと、不動産屋を飛

び出し、目的もなく走り出した。
気がつくと、わたしは不動産屋からかなり離れたところでしゃがみこんでいた。また、こんなことをしてしまった。いつもそうなのだ。自分ではこんなことはするつもりではないのに、気が付いたときにはもう、相手がわたしを見る目は変わってしまったっていた。
桑原さんを嫌な気分にならせてしまったかもしれないと後悔した。だが、そうではなかったのである。

転機

次の日、あの不動産屋にはもういけないなと思い、別のところに行こうと家を出たところで、携帯が音を立てた。知らない番号だった。「もしもし?」

「浅野公佳さんですよ。桑原恵です。昨日の。」
名前を聞いても、すぐにぴんと来なかった。しばらくして昨日の出来事を思い出した。

「あ、桑原さん!昨日はごめんなさい。あの、ホントにわたしが悪かったです。いきなり大声出したりして。」
「急にお電話してごめんなさいね。昨日のことは気にしなくていいよ。実はね、個人的にあなたに紹介したい物件があるの。今から都合つかない?」

昨日は、あんな醜態をさらしてしまったのに、いまさら合わせる顔もない。でも、お詫びに行っておいた方がいいのかもしれないと思った。どうせ、ほかに用事といつても家探した。

紹介してくれるという物件に一番近い地下鉄の出口で、1時に待ち合わせの約束をして電話を切った。
地下鉄の駅には1時5分前に着いた。わたしは割りと時間は守るほうなのである。桑原さんの姿は見当たらなかった。しばらく待っていると、車道から声をかけられた。

「浅野さん!」
桑原さんだった。昨日の制服姿とは打って変わって、カジュアルな格好をしている。彼女は青色のコンパクトカーの助手席の窓を開けて、こちらに手を振っていた。

「わたし、てつきり歩いていくんだと思ってました。」
助手席のドアを開けながら、失礼しますなどといって乗り込んだ。
「場所があなたの通う学校のすぐ近くになるのよ。だから、ちょっと歩くと時間かかるから。」

彼女は、車を発進させると、何もしゃべらなくなった。

わたしは、なぜこんな個人的に紹介なんてするのか、怪しさ全開のところをどうやってやりわり聞き出そうか頭を悩ませていた。しかも、今日は口調が違うし。そんなことを考えている間に、車が止まった。

「着いたわよ。」

5台ほど余裕で置けそうな駐車スペースだった。目の前にあるのは、どう見てもアパートでもマンションでもない、2階建ての一軒家である。どちらかというところ、洋風な造りをしていた。しかも周りの家に比べて格段に大きい。少なくとも、おばさんの家よりは、はるかに大きい。なんだか、大きさの表現が自分の中で貧弱なことに気づき、情けなく思いながら、今はそんなことどうでもいいのにと一人でツツこむ。

状況が読めなくて、混乱していることが自分でもわかった。

「中に入りましょ。」

よく見ると、不思議な造りをしていた。正面に玄関があるのは普通だが、2階部分にも同様に玄関らしきものがある。左手にはその2階に続く階段があり、要するに、2階建てのアパートの1階、2階部分それぞれ1部屋ずつしかないというような（アパートとは比べようもないほど豪華だが）感じた。

桑原さんが1階の玄関のドアを開けた。ポーチも広くて、靴がいっぱい置きそうだ。でも、わたしの靴なんか置いてもありあまるし、玄関がわたしの靴を拒否している。

ポーチで突っ立っていると、

「何してるの、早く入ってきたら？」

と桑原さんにせかさされてしまった。

玄関から奥へつながる廊下の左右と突き当たりに扉が全部で6つあり、それらがすべて何かしらの部屋だと思われた。何の部屋だろうと考える間もなく、桑原さんが一番手前の左側の扉を開けた。

「ここは、キッチンよ。」

キッチンとは言え、リビングもかねていると思われる広さがある。とても使いやすそうなカウンターキッチンの向こうの窓からは、先程、木で隠れて見えなかった庭にベンチやテーブルが置かれているのが見えた。

「あと、ここがお風呂と洗面所で、ここはトイレで・・・。」

彼女が部屋の説明を続けるのを、わたしはさえぎった。

「あの一！」

「どうしたの？」

「どうしたのじゃありません。何ですか？ここ。わたし、なんでここに連れてこられたのかまったく意味がわからないんですけど。」
彼女が一息ついた。

「部屋を探してるんでしょ？」

「そうですけど。」

「私はここを借りないかと勧めるために今日あなたを連れてきたんだけど。」

さらに、わたしの頭は混乱し始める。借りる？ここを？だって、いくらするの？

「あの、わたし、桑原さんに予算言いましたよね？」

「ごめんなさい。一から説明しなくちゃいけなかったわね。じゃ、ちょっと座って話しましょうか。お茶でも入れるわ。」

桑原さんは、キッチンに戻ると、わたしにソファに座っているように言い、慣れた手つきでお湯を沸かし始めた。どうやら、棚の中には、ある程度の食料品もそろえられているようだ。

「どうぞ。」

目の前に紅茶が置かれた。そして、桑原さんもソファに座って話を始めた。

「まず、ここを紹介するのは、私個人であって、私の会社はまったく関係がないの。この家の所有者が、1人で住むにはもったいないから、誰か借りたいという人がいたら、貸してあげたいと言ってるの。」

「この家全部ですか？」

「いえ、この1階だけ。2階は今も実際に使っているし、あなたがもし、住むことになっても2階にはこの家に人はそのまま使うことになる。だけど、この家は、1階と2階がまったく別になっているから、マンションと一緒によ。外の階段を見たでしょ。あれで、2階にはそのまま上がれるし、奥にも階段はあるのだけど、その手前の扉はこちら側からしか鍵がかけられないから、2階の人が入ってくることはできないの。家具もすべてそろっているし、そこに少し、食料品が残ってるけど使えるものは使ってたかまわないうって言うわ。」

信じられない話だった。こんな広い部屋、想像もしていなかった。そして、一番気になるのは家賃だった。

「家賃を気にしてるかもしれないけど、光熱費込みで4万でいいって。わたしがあなたの予算を言ったら、予算どおりでかまわないうって。」

さすがにわたしも黙っていられなくなった。

「そんな、おいしい話、なんかあるんですか？なんか、引っかけようとしてるんですか？なんのために？冗談でしょ？」
そういうと、桑原さんは少し微笑んだ。

「面白い人ね。だます人にだましてるんですか？って聞いても、はいなんて言わないわよ。」
わたしは何もいえない。

「安心して。そんな気まったくないから。本気で進めてるの。この人はね、そこらへんのよくわからない不動産屋を介するより、私がいいと思った人に借りてほしいと思っているの。家賃で儲ける気はないけど、空いているし、借りたいと思ってもらえれば貸してあげたいっていう感じなの。」

「なんで、わたしなんですか？」

わからなかった。この人とは、一回あっただけの人だ。

彼女は私をじっと見つめた。

「あなた、どういう事情かわからないけど、男がダメなことは確かよね。」

「ああ、やっぱりわかったんだ。」

「あんなことすれば当たり前か。」

「もしかしたら、昨日のこと気にしてる？」

「彼女が聞いてくる。そうじゃない。あなたにどう思われたのか気になる。」

「わたしはずっとだまっていた。」

「昨日のことはもういいから、わたしの思ったことを言うわね。黙っているって言うことは、肯定してるってことよね。だから、あなたに住んでほしいの。あまり詳しいことは私から言いたくないの。でも、この人は、とってもいい人なのは確かよ。私が保証する。そのうち理由もわかってくると思うけど、あなたなら大丈夫だと思うの。」

「ついに我慢できなくなってわたしは反論した。」

「そんな漠然とした話じゃ納得できません。あなたにあったのも2回目だし、何を信じるというんですか？」

「隣に男の人が来たら、嫌なんですよ？アパートなんて人の入れ代わりが激しいのよ。最初は女の子が隣でも、一月で変わっちゃったともあるのよ。どうするの？」

「そのとおりだった。それでも抵抗してみた。」

「これから、こんなんじゃないいけないと思って努力していくつもりでしたから。それならそれでなんとかやっていくし。」

「無理よ。そんな急には。」

「すぐに否定された。でも、そのとおりだ。自分でもわかっている。」

「あなたのためでもあるのよ。決してだましてるわけじゃないからあなたからお金を取ろうとかなんて思うわけないでしょ。見てわかるじゃない。」

「私は納得する。こんな家に住めるほどの人がこんなわたしから何を取るといえるのか。」

そのとき、わたしは覚悟を決めた。自分を変えるにはここからかもしれない。
そうして、一歩を踏み出すことにしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9191i/>

ジュン・アイ

2010年10月9日21時17分発行